

## 翁久允と没後50年 川崎順二・小谷契月

展示期間 令和三年六月十八日(金)～十二月中旬

### はじめに

おわら風の盆は、毎年、富山市八尾で九月一日から三日にかけて開催され、多くの人々を魅了し続けてきました。二百十日の頃、風と水の町に響く唄の声、囃し、太鼓、三味線、胡弓の音色、情趣あふれる洗練された踊りは、宵から夜になるにつれ美しさを増していきます。

おわら風の盆は、八尾の町の人々によって受け継がれ支えられてきました。近世から行われてきたおわら節は、明治末期に改良運動が始まり、八尾の医師で私財を投じてその発展に尽くした川崎順二の尽力によって、大きな転換期を迎えました。川崎は、昭和三年(一九二八)に八尾を訪れた小杉放庵におわら歌詞の作詞を依頼し「八尾四季」が生まれ、この歌詞にふさわしい踊りを、と、若柳吉三郎に振付を依頼しました。昭和四年(一九二九)には、川崎順二を中心に、「越中八尾民謡おわら保存会」が発足しました。全国的に活躍する文人たちが多く八尾を訪れておわら歌詞を新作り、踊りは改良を経て洗練され、現在のかたちに整えられていきました。

翁久允(一八八八～一九七三)は、昭和四年のおわら保存会設立総会に招かれて東京から出席した一人でした。翁は現在の立山町出身の小説家・ジャーナリストで、十八年の在米期間を経て、昭和四年当時、『週刊朝日』の編集に携わっていました。後に朝日新聞社を辞し、昭和十一年(一九三六)、郷里富山で郷土文化誌『高志人』を創刊、主宰します。

翁は『高志人』創刊の頃から戦後に至るまで多くの文人たちを八尾へ案内しました。川崎は彼らを自邸に招いてもてなし、文人たちはおわら歌詞を新作し、また『高志人』に八尾やおわらについての文章を寄稿しました。

近代におけるおわら風の盆の発展は、川崎順二を中心に、民謡詩人の小谷契月や長谷川剣星、画家の林秋路をはじめ、八尾の町の人々によって支えられてきました。そして、彼らとの交友を通じて、富山県内外で活躍する多くの文人たちをはじめとした

各界著名人を紹介し、八尾へ案内した翁久允の協力が、戦前・戦後のおわら風の盆の歩みとともにありました。

現在、高志の国文学館では、公益財団法人翁久允財団の協力を得て、翁久允旧蔵資料の調査を行っています。令和三年(二〇二二)は、川崎順二(二八九八～一九七二)、小谷契月(一九〇二～一九七二)の没後五十年に当たります。これを機に、今回の展示では、川崎順二と、翁久允の交友を中心に、小谷契月との関わりについてもふれながら、翁久允の手に残された書簡や記録、また、八尾を訪れた文人たちの原稿などを、おわら歌詞とともに紹介します。

### 展示作品・資料

#### 〔凡例〕

・本文は、令和三年度高志の国文学館常設展示室特別コレクション室展示「翁久允と没後50年 川崎順二・小谷契月」(令和三年六月十八日～十二月中旬)において展示公開する展示作品・資料について、列品番号、作者名、作品名・資料名、掲載誌、年代、所蔵、キャプションを記し、また、翁久允の自筆資料および郷土文化誌『高志人』において発表された文学者の自筆原稿の翻刻を掲載するものです。  
・本文の表記は、原則として、翻刻および引用については、原文のままとしました。ただし、原字母に近い字形の可成り、ひらがな、またはカタカナで表記しました。その他の部分は、現行通用字体を用いました。  
・翻刻は、翁久允の自筆資料は、展示に関わる部分を掲載しました。原稿は、全文を掲載しました。改行は原則として原文のままとし、丁移りは、丁終わりを「重カギ(—)」で示しました。また、原稿については『高志人』との異同を(※)を付して記しました。ただし、字体、区切り符、ルビ等の異同は割愛しました。判読不明字は(□)で示しました。  
・著作権およびプライバシーには配慮いたしましたが、お気づきのことがございましたらご連絡ください。

#### 1 川崎順二 翁久允宛封書「拝啓 新春」(昭和五年一月二十三日付)

翁久允旧蔵(個人蔵)

便箋二枚、封筒一枚。墨筆。翁久允が『民謡音楽』第二巻第一号(一九三〇年一月)に発表したおわら歌詞を、おわら保存会の刊行物に掲載したいので清書して送ってもらえないかと記した書簡。翁久允作のこのおわら歌詞は、『世界音楽全集 第十三巻 日本民謡曲集』(春秋社、一九三〇年)にも収録されている。

この書簡の日付の約半年前、昭和四年(一九二九)八月十一日に、越中八尾民謡おわら保存会が、川崎順二を中心に発足した。翁久允は、漫画家の麻生豊、画家の水木伸一、藤田健次らとともに招きで来富し、設立総会に出席、川崎邸に投宿した。八尾お

わら資料館には、この時の礼状をはじめとして、翁久允から川崎順二に宛てた多数の書簡が残されている。

2 川崎順二 翁久允宛封書「啓上 桜期節も」(昭和十一年五月一日付)

翁久允旧蔵(個人蔵)

便箋一枚、封筒一枚。墨筆。翁久允作の戯曲集『釈迦如来』(日本書房、一九三六年)を贈られたことへの礼状。塵入り和紙の便箋には、「壺中庵用箋」と印刷されている。壺中庵は、川崎順二の雅号で、小杉放庵より贈られたという。他に、悦堂の号もある。翁はこの年の九月、『高志人』を創刊。川崎順二は、発刊記念会に参加した。

川崎は、詩人、俳人、歌人、作家、画家、彫刻家、音楽家、舞踊家、芸能人など、各界で活躍する人々を積極的に八尾に招いてもてなし、実際におわらを見てもらったうえで、歌詞の制作を依頼した。書画、浄瑠璃などをたしなむ趣味人で、芸術文化に造詣が深かった川崎だが、自分では人前でおわらを披露することはなかったという。また、『続八尾町史』によれば、おわらについては「おわらはプロ化してはいけない。あくまで素人であることに価値がある。」と常に周囲に話していた。

川崎邸には、「鱈福帳」と名づけられた和紙製の横型冊子があり、投宿した文人墨客はそれぞれに書画を残した。昭和三十年(一九五五)、翁久允は『高志人』第二十六卷六月号に、こう記している。「室積徂春、邦枝完二らとやつて来たときに初めて作った「鱈腹帳」はあれから十数年間に、ほんとにタラフク帖になっている。自分も一筆加える」。室積、邦枝らと八尾を訪れたのは、昭和十三年(一九三八)九月のことであった。

「鱈福帳」を含め、川崎順二のもとを訪れた文人たちの関連資料や作品、おわら保存会の歴史がまとった資料群は、現在、川崎邸跡に建てられた八尾おわら資料館に収蔵・展示されている。

展示資料1、2を含め、『高志人』創刊以前の翁久允と川崎順二の書簡は、須田満「翁久允と川崎順二―「高志人」創刊までの往復書簡」(『とやま文学』第三十九号、二〇二二年三月)に全文の翻刻と詳しい解説がある。

3 福田正夫 原稿「高志行脚即興三篇」(『高志人』第二巻第二号(昭和十二年二月)掲載)

翁久允旧蔵(個人蔵)

原稿用紙三枚、ペン書き。昭和十二年(一九三七)一月、翁久允は、詩人の福田正夫、白鳥省吾、吉澤獨陽とともに富山から汽車で八尾を訪れた。一行は川崎順二邸に一泊し、おわら節を堪能した。福田は、三篇の詩を通じて雪の情景を記しているが、八尾については「町を心一つとして うたに生くるはうれしきを」と記し、うたの町であることを強く印象づける。

〔本文〕

高志行即興三篇

福田正夫

○

うす雪の越後過ぎ来て  
暁を富山は晴れぬ  
遠山脈をうち見れば  
こゝろもつよく躍るかな。

※『高志人』には、冒頭「正月六日、大阪から金澤を経て富山へ入る。八尾を経て高山線で歸京」とあり。

あゝ立山の太根雪  
落ちくる水の河川かみくを  
わたれどいまだほのぼのと  
越中平野のゆめ深し

明日は晴れかや曇りかや  
雨か小雪か吹雪かや  
旅人なればなにごと  
たゞためしみてゆかむはるばる。

○

雪戀ふ越に来てみれば  
いまや雨とぞなれりけり

夕ぐれ宿の灯の下に  
友と語れば、静かなる。

歌に慕<sup>した</sup>しく胸ふかく  
はなれてみれどたゞゆめに  
生きて心を通はせば  
越も都もとほからず。

あゝ、立山の雪の白  
北風やがて雪となり  
一望鎧々魂を

洗ふといふもふさはしや。

○

八尾の里に来てみれば  
やゝに雪さへ降りくれど  
いのちの熱きおわらぶし  
きけば涙のこぼるかな

西へ東へ北の國

われはさびしき旅<sup>もの</sup>人なれど  
町を心一つとして

うたに生くるはうれしきを。

あゝうたよ八尾よおわらぶし  
うたに傳へし日の本の  
こゝろ尊しいのちごゑ  
なほもきゝなむいのちごゑ。

※『高志人』では「雪の日」

4 川路柳虹 原稿「富山の印象」(『高志人』第四卷第八号(昭和十四年六月)掲載)

翁久允旧蔵(個人蔵)

原稿用紙五枚、ペン書き。昭和十四年(一九三九)五月十五日、翁久允、詩人の川路柳虹、佐藤惣之助、小説家の横山美智子は、越中八尾民謡おわら保存会の招待で八尾を訪れ、城ヶ山でおわら節と踊りを鑑賞した。その夜、一行は川崎邸に宿泊し歓待を受けた。『高志人』第四卷第六号では、四者それぞれに、八尾の印象を詩文や滞在記として記している。

川路柳虹のこの原稿は、『高志人』では「富山と八尾」という題で掲載された。川路は、文中、川崎順二の熱意に触れ、また、「私はあの唄と踊りが八ツ尾の自然、八ツ尾の坂町と断ち切り難い關聯にあることに於て「おわら」を賞美する。」と、その風土性に魅力があると記している。

〔本文〕

富山の印象

川路柳虹

※『高志人』では題は「富山と八尾」

越中富山の反魂丹で謳はれた富山は年來の薬都として天下に響いてゐることは萬々承知してゐたが、新しき富山は見ぬまではその都會的要素を全然考への外にしてゐた。新潟と金澤とは前にも一二度訪れたが汽車で素通りする富山は外から見ると、中へ入つてみるとでは雲泥の相違であると思つた。

薬都としての富山はあの堅固な上蔵造で代表され、明治日本型の最も立派な――今見ても決して混血兒の文化住宅や薄つぺらな化粧煉瓦の商舗などには全然見られない堅固な美が備はつてゐる。今東京ではわづかに日本橋の一角、室町や鉄砲町あたりの間

屋筋に残つてゐるだけで、もう全然その影をひそめた明治文化の遺産をこゝで格段に美しい姿で見られたことは何より嬉しかつた。

だがこゝにも新しいアメリカ文化が浸潤して

「宮市大丸」の如き「電ビル」の如き能率的、近代建築が聳ゆるに至つてゐる。これも東京と同じことだ。日本の舊文明がこの近代主義に脆くも膝を屈せざるを得ない理由は、しかし単に「建築の様式」の問題だけではない。その背後の商業文化、資本文化が然らしめるのだから何と言つてもその動きは必然である。東京が然る如く日本の地方都市がその通りの影響をうけてゐる。

宮市大丸や電ビルを「在らしめ」てゐるものは実にこの旺盛な資本主義文明の偉力に

他ならない。煙突の林立する富山の一角をよく凝視することだ。水力電気の経済的能率的機能によつて潑刺たる生産

の實を擧げてゐる工業都市富山の存在が手工業的薬都、封建的薬都のアウス・バウとしてのしかゝつてゐる。それはまた薬都の変貌を齎らしめると同時に一切の原動力として存在してゐる。不二越の如き大工場がこの軍需景氣の原動力たる存在を示すと共に、その生産と富は宮市大丸の如き消費面に華を咲かすのである。

つまりこの地方の一都市も決して美しい自然の背景と何らかゝはりなく生産それ自身によつて健康に伸びるのである。 田園日

※『高志人』では「舊文化」

※『高志人』では「健氣」

本が段々に影を没して煙突の日本、工業の日本が大陸を抑へるのも必然がこゝにも見られる。立山連峯は詩の如く清らかな白雪に輝いてゐるが恐らくその美は富山の富の何百分の一をも生産せしめないであらう。

夕日に輝く立山連峯を汽車中から眺めて十年の昔に瑞西から伊太利へ向ふ旅でみたアルプスの一角の夢を追つた。山は女神の如く永遠の美に恍惚たる面貌を示してゐる。自分は車窓からうつとりと眺めてゐた。すると二人の若い女性が突然車内へにこやかに入ってきた。Y女史と自分に「署名をしてくれ」と言つて小さな本を差出した。

「綺麗ですね、今日はすっかり山が見えますね」自分は山の方を見てたゞ感嘆してゐたがその女性は「いつも見てゐるので何とも思ひませぬわ」とそつけなく言つた。

これほどの自然の美に親炙してゐながら日常の生活からはすつかり「自然」が忘れられて終ふのだ。これはたゞにこの女性だけではない、近代文明機械文明に馴れて終ふ吾々の感覚がナマな自然からの魅惑に自然麻痺して終ふ結果である。

八尾の町でおわら節と踊を見た。川崎博士は唯一の、熱情を以てこの「おわら」のバトロネージを企てゝをられる保護者である。私はあの唄と踊りが八ツ尾の自然、八ツ尾の坂町と断ち切り難い關聯にあることに於て「おわら」を賞美する。「おわら」は富山の町中で藝術家から歌はれてもさほどの感興はない。一度あの

※『高志人』では「たゞこの」

※『高志人』では「バトロネージ」

坂町の空気、井田川の水光と山容の美とに圍まれた中で聞いてはじめて「いのち」を感じる。それは遠い父祖の「うぶすなの土」から生れた聲だからである。そこには恒久の生命が波うつてゐるからである。

あの八ツ尾の町並は實に素樸で古雅で

※『高志人』では「八尾」、「素朴」

ある。あの形態はどこまでも保存されたい。それが富山の市的生産に對する唯一の田園的

富の誇りでもある。「特色を持って！」それは誰

※『高志人』では「もて」

にも言ひたいことだ。誰もがレディメイドの洋服をきて終ふから誰もがサラリーマンに見えて終ふ。これは悲しいことだ。

5 長谷川伸 原稿「小原節と『一本刀土俵入』」(『高志人』第七卷第十号(昭和十七年十月)掲載)

翁久允旧蔵(個人蔵)

原稿用紙七枚、ペン書き。昭和十七年(一九四二)九月一日、小説家・劇作家の長谷川伸は、本山荻舟、土師清二、梶野惠三、森健二とともに、おわら風の盆にあわせて八尾を訪れ、川崎順二郎に投宿した。

「一本刀土俵入」は、長谷川伸作の戯曲で、横綱になり損なつて博徒となつた駒形茂兵衛が、十年前に恩を受けたお鳶とその家族の窮地を救うという筋の股旅物である。昭和六年(一九三一)六月に東京劇場で初演。歌舞伎、前進座、新国劇、映画、大衆演劇などしばしば上演され人気を博した。

駒形茂兵衛は、親方に追い出され困り果てていたところ、常陸の取手宿(現在の茨城県取手市)のあびこ屋で酌婦として働いていたお鳶に出会い恩を受ける。お鳶は、帰れぬ遠い故郷のうたを口ずさむ。それが、「おらちや友達やなたねの花よ 盛りすぎればヲワラちらばらと」というおわら節であつた。

長谷川は、この原稿において、「一本刀土俵入」はおわら節を普及させたが、舞台でのおわら節は十分なものではないと記す。その理由は、「八尾といふ郷土の色を他郷のものにはどうにもならない、“故郷の深い味”にあるという。末尾には「今度、

『一本刀土俵入』が私の心にびたりとした上演の機会がきたら、序幕のあく前に川崎順二医博を煩はして本物の小原節を聞かせてみたいと思ふ。さうしたら小原節のもつ郷土芸術のねうちと共に、この芝居がもう一ツ良き響きを立てるだらうと思つてゐる」と記し、おわら節は八尾の土地と分かちがたいことを強調する。

(本文)

小原節と『一本刀土俵入』

いっぽんかたなどへうりり

長谷川伸

親方から銭六百文わたされ、どこへでも行けと、旅先で追ひ出された力士の卵の駒形茂兵衛が、常陸の取手宿のあびこ屋の酌婦お鳶に

巾着ぐるみ銭と櫛簪の上に、意見まで貰ふ

といふ処が、私の『一本刀土俵入』といふ戯曲にある。

お鳶 取り的さん、お前もお母さんが恋

しいのだねえ。夢をよく見るだらうねえ。

茂兵衛 当り前だ。姐さんのお母さんも死ん

でしまつたのか。

お鳶 あたしのお袋は生きてゐるのさ。

茂兵衛 そんならわしより少し増した。

お鳶 なあに――生きてゐたとて、どうで

満足には暮しちやみないに極まつて

らあ。

茂兵衛 どうしてるか知らないのか。

※『高志人』では「どうしてゐるか」

お鳶 遠いんだよ国が、だもの判りやしない。

茂兵衛 どこだ。

お鳶 信濃の善光寺様よりもツと先さ。越

中富山から南へ六里、山の中さ。

茂兵エ 信州から先なら、わしはまだ知らない。

お蔭 (思い出して泣けてくる顔を隠すとて、

うしろ向きになり声を低めて唱ひ出す、

故郷の名物小原節)、おらちや

友達や、なたね(菜種)の花よ、ハドツコ

いしよのしよ。盛りすぎればワワラちら

ばらと。

これが序幕にあつて大詰では、困苦のうち  
に辰三郎といふ男に、節を立て、一人子のお

君相手に、小原節をうたつて餚あめを賣るお蔭つた  
家へ、年久しくして歸つてきた辰三郎に降り  
かかる難儀を、前の取りの後身

で、横綱になり損ねた茂兵エが尋ねてきて、身を挺ていして救ひ、『ああ、お蔭さん、十  
年前

に櫛簪あね巾着ぐるみ意見を貰つた姐さんに、  
せめて、見て貰ふ駒形のしがねひ姿の、これが  
横綱の土俵入りでござんす』、といふのが幕切れ  
の台詞だ。横綱になり

損じた茂兵エが、お蔭を探しあてる手蔓にな

つたのが、序幕で聞いた小原節といふ事になつてゐる ※『高志人』では「なつてゐるが」

まあ、小原節をこの程  
度の重要さに使つた戯曲は、この他にはない  
かも知れない

昭和の初めごろ、私は高山線が岐阜から焼  
石までしかない時、雨の暗夜に、私の他にもう

一人の乗客が残つただけの列車から駅の外へ  
出た。土地の人とみえてさつさつと行つてし  
まつた足音が消えたあとに、独り残つた私が、駅に居合せた

自動車の人に深切にして貰ひ、下呂

温泉へつれて行つて貰つたしかも五十銭である

。それが機縁で書いたのが戯曲『中山七里』

で、土地の為にこれが役に立つたさうで、後年、

盛んなる歓迎をうけ、今でも下呂とのつながりが

浅くない。この戯曲は東京で尾上菊五郎君が大阪で坂東壽

三郎君が故河合武雄君と同時に初演した

下呂から小阪を経て高山へはひつたそのときの私は、猪の谷を  
越えて富山へはひる途中、富山にだいぶ近くな  
つてから、ふと耳にしたのが小原節だつた。そ  
れを『一本刀土俵入』に使つたといふ訳である。

”おらちや友達やなたねの花よ盛りすぎれば  
ちらばらと”といふ歌詞はそのとき聞いた  
ものの如くでもあり、後に採拾したもの如く

でもあり、確なる記憶が、場所とともに今はなく  
なつてゐる。

『一本刀土俵入』は尾上菊五郎君が初演し、大  
阪では坂東壽三郎君が演り、その後、新国劇  
の島田正吾君が演り、前進座の中村翫右エ  
門君があり、浅草で梅沢昇君が演り、大阪

では市川小太夫君が演り、この間

当人から聞いたのだが、勝見庸太郎君も演つ

たし、また、近江次郎君とか何とか彼とかいつた  
連中までが、云つてみればどのくらゐ演つてゐる  
か見当がつかないほど演つてゐるから、越中八

尾の小原節普及はこの戯上演だけでも可成り広い範圍わにわ ※『高志人』では「小原節の」  
たつてゐる。その他に映画では片岡千恵蔵君、

長谷川一夫君(林長二郎時代に)、藤井貢君、  
がやり、浪曲では広沢虎造君、春日井梅鶯君その  
他が演つてゐるから、普及はいよいよ手広いのだが、小原節の佳さを普及したことに

※『高志人』では「五十銭である」

※『高志人』では「だいぶん」

※『高志人』では「翫右エ門君が演  
り」

なつてゐない」といふのは

舞台でもその他でも、小原節そのものは

一ツもうまく行つてゐないからである。菊五郎君初演の

ときなどは、もう少しの処で、危く小原節と安

來節を勘違ひして、アラエツささあといふ唄

をやられるところだつた。新国劇はお蔭の役が久

松喜世子君で、そのころ大阪へ行つてゐた八尾

か富山出身の力士に教はつて唱つたので形だ

けは一應ついてゐた。前進座は河原崎国太郎

君でこれも一應のところ小原節になつてゐ

た。一應であつて確にではないのであつた

映画の方は録音が自在だから、唱へる人にあとから

吹込ませるテがある。だがこれはど

このも矢張りうまく行つてゐなかつた。

○

小原節のレコードばかり数枚探して、それ

を聞いて又聞きして、戯曲に使つたのだから、

越前福井、加賀山中、越中八尾、さてはその他

と、作者の耳に小原節はあるのだが、不

器用で音痴な私にはそれを活かすこと

が出来なかつた。八尾のは真似るにも

真似られず、どうにもテがつけられないので、

結果は小原節のレコードを買ひ

あつめ、その中から名を忘れたが、福井の芸者

がうたつたのが、一番真似いいので、『一本刀

土俵入』が上演されると、福井の小原節でや

る方がいい八尾の本物はテがつけられ

ぬといつてもいつたものである

今でもそれをさう思ふことに変りはない

※『高志人』では「舞台でも」

「そのものは」ナシ

今年の風の盆に友達四人と、八尾に案内さ

れて本物を心ゆくばかり聞かせて貰つたが、

テがつけられぬといふ考へ方は矢張り変

へることが出来ない。手がつけられぬとは八尾といふ郷土の色を他郷のものにはど

うにもならない。故郷の深い味」といふことである

私はズツと前、独り出雲に旅して、境湊で大

雨にあひ、勝手は知れず困つてゐるとき、聞い

安來節の三味線の音に、ぞくりと襟許が冷た

くなるほどの哀愁を聞いたことがある。戯曲

にそれを使ひたくなつて、後年、その音を再び

聞かうと思ひ、安來節レコードを可成りあ

つめたが、私の聞いた音にぶツからない、それか

らも絶えず漁つて、たうとう以前筑前琵琶をや

つたことがある芸者で何とかいふ人のレコード

から、求める音を漸く聞くことが出来た

驚の印がついてゐる疵だらけの怖しく古い盤

だつた。妙なもので求めた音にはぶツかつ

たが、私の頭の中からは安來節を使ふ戯曲に

熱情が去つてゐて、どうにも戻つてこないの

その俣になつてゐる。八尾の小原節の三味線の

音には今いつた音よりもツと深いものがある。

それだから私のいふテがつけられないのである。

○

今年、『一本刀土俵入』が私の心にぴたりとした

上演の機会がきたら、序幕のあく前に川崎順二医博を煩はして本物の

小原節を聞かせ

上演の機会がきたら、序幕のあく前に川崎順二医博を煩はして本物の

小原節を聞かせ

※『高志人』では「音を雨で」

「※『高志人』では「聞いた」

それから芝居へはいつてみたいと思ふ。さうしたら小原節のもつ郷土芸術のねうちと共に、この芝居がもう一ツ良き響きを立てるだらうと思つてゐる。

## 6 川崎順二と林秋路の共作による掛軸

高志の国文学館蔵

林秋路作のおわら歌詞を川崎順二が墨書し、それに秋路がおわらを踊る女性の彩色画を添えた作品。『おわらと林秋路―風の盆の画家』展図録（高志の国文学館、二〇一七年）所収。

### 〔本文〕

花を見たよな覚えかないか

たしか酔ふたは おわら 花見酒

為林秋路氏 壺中庵（印）

## 7 翁久允 小谷恵太郎宛便箋複写控「拝啓 先日ハ」（昭和二十年二月二十日付）

翁久允旧蔵（個人蔵）

一冊。この冊子は、翁久允の書簡控である。コクヨの商品で、表紙に「便箋複写簿」と印字されており、カーボン紙で複写して控えを残すことができる。

小谷恵太郎（契月）宛てのこの書簡は、高志社創立総会への出席を依頼するものである。この頁の前後を見ると、この書簡の前頁は、川崎順二宛の出席依頼である。八尾から高志社同人となったのは、川崎順二、小谷恵太郎、玉生寛治の三名であったが、数日後の川崎宛の書簡控えから、川崎、小谷ともに総会は欠席であったことがわかる。文中、「東京から高志社同人になつて頂く御相談を御願したが」とあるが、翁は『高志人』創刊以来、昭和二十年三月末に富山に疎開するまで、富山と東京を半月づつ行き来して仕事を続けていた。

高志社は、戦時中の雑誌統合により、翁久允が主宰する『高志人』の発行元である高志人社を含めた県内六団体を統合した組織で、昭和十九年六月から昭和二十年六月まで雑誌『高志』を刊行した。高志社創立総会は、昭和二十年二月二十七日に開催された。『高志』第二巻第三号（昭和二十年三月）には、高志社同人四十名の氏名と、

うち十八名が総会に出席したことが記されている。

川崎順二は、昭和十一年九月十六日、『高志人』の創刊に際して発刊記念会に参加し、また、戦後、「八尾高志人会」結成の折には、川崎順二、小谷契月はじめ、多くの人が名を連ねた。

書簡末尾に「吉井君をよろしく御願います」と記されるのは、二月十日に八尾に疎開した歌人の吉井勇のことである。吉井は、六月から小谷契月の自宅に夫妻で身を寄せることとなり、終戦を迎えた。

## 8 「八尾高志人会 結成」（昭和二十二年一月二十五日 「高志人出席者名簿（志）」より）

翁久允旧蔵（個人蔵）

一冊。墨筆。この冊子は、翁久允のもとを訪れた人々が自筆で氏名を書き入れた名簿である。「八尾高志人会 結成」と記されたこの頁は、昭和二十二年（一九四七）一月二十五日、八尾西町の料亭「一力亭」において、『高志人』八尾支部会が結成された折のもので、壺中庵（川崎順二）をはじめとして、林秋路、小谷恵太郎（契月）ら、八尾の文化を担う人々が出席し、それぞれ自筆で記名している。末尾には、「銚子かはりは何時でもよいが 心變りはおわらいつもいや」というおわら歌詞が記されており、うちとけた場の雰囲気を感じられる。この歌詞は、大正年間のもものとされる「大藁節歌集」（『おわらの記憶』（桂書房、二〇一三年）所収。原本は八尾おわら資料館蔵）に記される古謡である。

『高志人』は、戦時中、『高志』と改称して刊行を続けたが、戦況の悪化により、昭和二十年六月以降刊行を停止していた。戦後、昭和二十一年三月に復刊号を刊行。八尾支部会は、戦争によって中断を余儀なくされた『高志人』の活動を再開するなかで結成された。『高志人』第十二巻三月号（昭和二十二年三月）には、当日の次第や出席者、また、同日開催された翁久允講演会の要旨が記されている。

### 〔本文〕

八尾高志人会

結成

二十二年一月二十五日

於 一力亭

- ✓ 壺中庵
- ✓ 林秋路
- ✓ 太田兵吉
- ✓ 松本七兵衛
- ✓ 林昌幸
- ✓ 小谷恵太郎
- ✓ 熊野安藏
- ✓ 宮田和二郎
- ✓ 榊山宏
- ✓ 長谷川劍星
- ✓ 數納平三郎
- ✓ 長谷川洪越
- ✓ 玉生寛治
- ✓ 原秀一
- ✓ 金厚伴二
- ✓ 長谷川弘
- ✓ 長谷川彦次郎
- 一力主人
- 別格 ✓ 白川理一郎
- ✓ 摩島廣次

秀壹

銚子かはりは何時でもよいが  
心變りはおわらいつもいや

9 翁久允 自筆冊子「太稚庵写帖 四」

翁久允旧蔵（個人蔵）

一冊。墨筆。「太稚庵写帖 四」は、翁久允が書画や詩文、日々の出来事などを書き留めた自筆の冊子。昭和二十三年十月起筆。昭和二十四年（二九四九）四月、福田正夫と子息の福田達夫とともに八尾を訪れ、川崎順二邸に二泊した折の画や俳句が残されている。

「太稚庵写帖 四」によれば、八尾到着後の夕方、城ヶ山公園を散歩し、その後、鏡町の料亭「杉下楼」（現在の八尾コミュニティセンター分館杉風荘）でおわら保存会幹部による歓迎会があり、川崎順二、小谷契月、玉生寛治、林秋路、榊山宏、金厚伴二、熊野安藏らが参加した。

福田正夫「春十日富山の旅」（『高志人』第十四巻五月号（昭和二十四年五月））には、即興で作ったらしいおわら歌詞が記されている。蕎麦屋「高野」での一節を引用する。

夕方杉下楼にて饗宴深夜そば喰べに行く、おわら二つ「たかの」にて

そばの手づくり八尾で喰べた みなで飲まうか玉旭

ひさしぶりだよ八尾の人情 おわら踊るか町中で

また、翁久允は、同号の「編集餘語」に次のように記している。「福田正夫君が十数年ぶりで越中を訪づれ、十日ばかり遊んで歸つた。八尾おわら保存会の歌詞選を永らくやつてゐた関係で八尾では川崎会長初め是非来てくれといふので同行した。春祭の前日で、町の若い衆は山車の組立に大童だつた。櫻は満開で城ヶ山の春の氣分を抱擁してゐる。（略）八尾にはまだ八尾情緒といふものが残つてゐる。それはあの雁木下のせゝらぎが残つてゐるからであらうが、そのせゝらぎの音の中からおわら情緒が連想されるからでもある。川崎壺中庵はいつ行つても壺中庵で、そして秋路と恵月がいつ行つても秋路と恵月である」。翁がここで「恵月」と記したのは、小谷契月のことである。

〔本文〕

四月十七日好天

福田正夫と川崎壺中庵を訪ふ

〔画（山なみ）〕

眞白の薬師に笑ふ桃の花

醫師會の流れ

〔画「丘の上少女たち」〕

〔画「卯ノ花村」〕

夕方城山公園散歩

醫師會の連中酔歩マンサン

杉下樓にてオワラ保存會幹部

歡迎會、川崎、小谷、玉生、

林、榭山、長谷川、釜田、松原、

金厚、熊野、

八尾らしき歡迎席上、達夫乱酔

狂態、

高野柳作そばにて大井三杯半

壺中庵にて

摘んでゆでし食ふべて見たき牡丹の芽

木々の芽にのびよくと太鼓の音

四月十九日 雨、

稀に來し福田と籠居、曇

病友よさらば花の雨

まれ人にそぐわぬ花の日となれり

花の客として迎へて足らぬもの

酒のまぬなかまはさびし花の旅

むかし花に酔ひし友とも思はれぬ

花あわれ酒のまぬ友とあるあわれ

花十日酒をかわさでわかれけり

酒のまでもいふ春の夜はうとし

四月二十日

福田歸京の朝

朝の茶や囀り遠く又近く

川音や朝の茶に入るまだら花

若葉してまだらくや□桜

井泉水より良寛の句

賣弄三文墨一波

の解釈來る

○賣弄三文雨なれど花ハ花

10 小谷恵太郎 翁久允宛年賀状（昭和二十六年一月一日付）

翁久允旧蔵（個人蔵）

葉書。ペン書き。翁久允宛の年賀状。翁久允旧蔵資料において確認できる小谷恵太郎（契月）からの書簡は、現在のところ、この年と翌年の年賀状の二通である。一方、『高志人』を見ると、昭和十三年（一九三八）九月、室積徂春、邦枝完二、渥美清太郎の来富をきっかけに結成された高志吟社の句会に、小谷契月は参加あるいは投句している（『高志人』第三卷第十号、十一号、十二号）。また戦後、翁久允の手帳や記録類に、その名を確認することができる。例えば、「高志人社出席者名簿（巻）」では、前掲の「八尾高志人会結成」の他に、昭和二十二年六月と十月に合計四度、翁久允を訪問した記録が残されている。

翁久允と八尾の人々との関わりは、川崎順二との交友が第一であったようだ。そしてそこには、翁自身が「川崎壺中庵はいつ行つても壺中庵で、そして秋路と恵月がいつ行つても秋路と恵月である」と記したように、小谷契月や林秋路の姿が変わらなかつた。

小谷契月は、明治三十五年（一九〇二）、八尾町西新町の商家に生まれた。本名、恵太郎。善知鳥とも号す。少年の頃より詩作に励み、新体詩、民謡、俳句、舞句、短歌、脚本など幅広く文筆活動を行い、また、日本画にも優れた。著書に民謡集『影燈籠』、『仏法僧』などがある。おわら保存会の創設に尽くし、川崎順二の片腕として、長谷川劍星、林秋路らとともに八尾の文化の中心的存在として活躍した。

11 林秋路〈おわら踊り〉色紙

高志の国文学館蔵

林秋路が、小谷契月作のおわら歌詞を墨書し、おわらを踊る女性の彩色画を描いた作品。『おわらと林秋路―風の盆の画家』展図録（高志の国文学館、二〇一七年）所収。

〔本文〕

踊りつかれてあみ笠敷いて

草を枕の オワラ 盆の月

12 川崎順二 翁久允宛葉書「御手紙拝誦」（昭和三十年五月十二日消印）

翁久允旧蔵（個人蔵）

ペン書き。「高志人」が創刊二十周年を迎えるのを機に、各地に支部を設置することとなった。川崎から翁宛てのこの葉書は、八尾支部の発起人会と支部発会式を兼ねて開催すべく、日程を尋ねるもの。実際には、六月七日に開催されることとなり、川崎は支部長に就任した。また、「翁先生は同夜是非御來庵を乞ふ」とあり、親交がしのばれる。

13 翁久允 自筆冊子「東西南北」（昭和三十年）

翁久允旧蔵（個人蔵）

一冊。墨筆。「東西南北」は、翁久允が、自身の活動記録をメモ書きした自筆の和綴本である。昭和三十年（一九五五）六月七日には、八尾高等学校での講演内容の項目を記し、同日午後、川崎順二邸で休憩した後、「高志人」の八尾支部結成式があったこと、また、長谷川弘が座長を務め、支部長に川崎順二が就任し、八尾町長の梅谷久雄と県議会議員の玉生寛治が祝辞を述べたことがわかる。

『高志人』第二十卷七月号（昭和三十年七月）の翁久允「太稚庵日誌」を見ると、六月七日午前十時から十一時半まで、生徒四五〇名を対象に「青年のゆくべき道」について講演したとある。また、『高志人』第二十卷第六号（昭和三十年六月）には、午後四時から、八尾町母子寮修養室で行われた八尾支部結成式の次第と来会者の氏名、支部長川崎順二の挨拶、来賓の祝辞、翁久允の挨拶の内容が記されている。

川崎順二は、挨拶のなかで次のように述べている。「私は翁さんと相識つてから二十数年になる。そして中央の文壇人とか、各方面の名士に八尾町を紹介して頂き、おわら節等の郷土の名物が普く世間に知られるに至つたので、いはゞ郷土の恩人である」。

また、翁久允の挨拶の言葉には、川崎との親交のきつかけが述べられている。「私は八尾町と非常に深いゆかりをもっている。それは私が昭和十年十一月高山から越中入し八尾で一泊した時に、「高志人」発刊を思い立つたからである。亦、昭和四年に川崎さんがおわら保存会をつくられた時、東京の友人達を紹介し、天下におわら節

を知らしめる機縁をつくつた。それ以来川崎氏と親交を結んだ。亦、八尾町の人達とも親しく知ることが出来た。「高志人」は本年が丁度二十周年になる。そこで友人達のすゝめにより、地方に支部を設け、富山県を一九とした文化運動の組織網とすることにしたのである」。

翁久允と川崎順二は、昭和四年（一九二九）、越中八尾民謡おわら保存会の設立總會をきつかけとして親交を結んだ。その交友は、おわら風の盆の発展を支えるものであった。

〔本文〕

八尾高等学校 六月七日午前十時

世界と日本

明治の青少年 洋との前進

幕末の青少年 殻をひらく

今日の青少年 絶望

明日の青少年 希望

八尾支部結成式

六月七日 午後四時

一時から川崎邸で休憩、

三時開會が四時半となる

長谷川弘 座長

支部長 川崎順二

祝辞 梅谷久雄

〃 玉生

14 川崎順二 翁久允宛封書「酷暑の候」（昭和三十二年八月三日消印）

翁久允旧蔵（個人蔵）

便箋一枚、封筒一枚。ペン書き・印刷。翁久允におわら歌詞募集の選者を依頼する内容。筆跡は川崎順二のものではなく代筆と思われる。

おわら風の盆の開催にあわせ、おわら保存会は昭和四年（一九二九）の創設時から、

公募による新しいおわら歌詞の募集を行ってきた（平成二十一年から休止）。翁久允は、昭和十三年（一九三八）以降、戦前戦後を通じて、毎年選者の一人に名を連ねた。

昭和四十六年（一九七一）六月二日、小谷契月が逝去。川崎順二は、五か月後の十一月十一日に逝去した。翁久允は、「太稚庵はだか日記」（『高志人』第三十七巻一月号（昭和四十七年一月）十一月十二日の項に、「川崎順二の死が報ぜられた。おわら節保存会当時は交流もはげしかったが晩年は相逢う機も少くなっていた。何かと思節保存会当時は交流もはげしかったが晩年は相逢う機も少くなっていた。何かと思出深し」と記した。翁久允旧蔵資料には、川崎順二からの昭和四十年の年賀状が残されている。

#### 〔参考文献〕

『民謡おわら』（越中八尾民謡おわら保存会歌詞部、一九四九年）

『越中おわら』（富山県民謡おわら保存会、一九七三年頃）

『続八尾町史』（八尾町役場、一九七三年）

北日本新聞社編集局編『越中 おわら社会学』（北日本新聞社出版部、一九九八年）

神島達郎「風の盆を育んだ「越中おわら中興の祖」川崎順二」（『越中人譚』）

リップテレビ、二〇〇八年）

おわらを語る会編『おわらの記憶』（桂書房、二〇一三年）

綿引香織「企画展「風の盆 深奥の心をさぐる」（『高志の国文学館年報 平成二十六年

度』二〇一七年十一月）

綿引香織責任編集『開館五周年記念企画展 おわらと林秋路―風の盆の画家』（高志の

国文学館、二〇一七年）

長尾洋子『越中おわら風の盆の空間誌 〈うたの町〉からみた近代』（ミネルヴァ書房

二〇一九年）

逸見久美・須田満編『翁久允年譜 一八八八―一九七三 第三版』（公益財団法人翁久

允財団、二〇二〇年）

「特集 とやま文化の一断面―越中八尾おわら風の盆をめぐる」（『とやま文学』第

三十九号、二〇二二年三月）

小谷剣司監修、細川光洋・小松朗編『小谷契月作品集』（桂書房、二〇二二年）

#### 〔謝辞〕

本展示および展示解説の作成に際し、ご協力、ご教示を賜りました國田千鈴氏、小谷剣司氏、小松朗氏、須田満氏、林淑子氏、綿引香織学芸員に心から感謝申し上げます。

翁久允と没後50年 川崎順二・小谷契月 ガイドペーパー  
令和三年六月十八日

高志の国文学館（富山県富山市舟橋南町二―二二）